

# Mr.3

SHIBATA MASATO

## <PROFILE>

1985年12月31日生 宮城県出身

9歳の時 父の影響で民謡を始める。2001年15歳で津軽三味線 富塚 孝史氏に師事。津軽三味線を始めわずか2年で津軽三味線の全国大会で初優勝の快挙を達成する。その後、出場全6大会で13冠を獲得、津軽三味線奏者として史上最多の優勝回数を誇り名実ともに日本一の奏者として君臨し、今年2017年新プロジェクトを始動させる。



**3** 兄妹長男

**3** 0代日本男子

全国全6大会 **13** 冠達成

日本一の津軽**3**味線奏者

# 柴田 雅人

SHIBATA MASATO

## [受賞歴]

### <弘前>

- ・第26回津軽三味線全国大会 A級 チャンピオン
- ・第27回津軽三味線全国大会 A級 チャンピオン
- ・第29回津軽三味線全国大会 A級 チャンピオン
- ・第30回津軽三味線全国大会 A級 チャンピオン
- ・第31回津軽三味線全国大会 A級 チャンピオン(三連覇)

### <金木>

- ・第18回津軽三味線全日本金木大会 個人一般の部 A級 優勝
- ・第19回津軽三味線全日本金木大会 個人一般の部 A級 優勝
- ・第20回津軽三味線全日本金木大会 個人一般の部 A級 優勝(三連覇)

### <東京>

- ・第6回津軽三味線コンクール全国大会 一般の部 優勝

### <大阪>

- ・第2回全国津軽三味線大阪大会大賞の部 優勝
- ・第10回津軽三味線コンクール大阪大会 グランドチャンピオン

### <神戸>

- ・第1回津軽三味線全国大会 in KOBE 一般の部 優勝

### <名古屋>

- ・第2回全日本津軽三味線競技会名古屋大会 一般の部 Aクラス 優勝





## 柴田雅人物語

柴田雅人（しばたまさと）は、誕生からして際立っている。一九八五年寒さに凍える宮城県のある町で、十二月三十一日の大晦日に産声を上げた。取り上げた産婆さんの話によれば、「肝の据わったワラシ子だなあ」と何を指していったのかは定かではないがそんな赤子であったらしい。音楽、特に邦楽に特に関心があったわけでもなく、普通に宮城の男としてすくすく育っていった。そんな柴田雅人が邦楽へ足を踏み入れたきっかけは、時計の針を九歳の時まで戻す必要がある。

その頃、毎日お風呂場から聴こえてくる父親の気持ちよさそうに唄う民謡の響きに、小学4年生の雅人は「俺もあんな風に気持ちよくなりてえ」と民謡を習い始めることになる。唄をである。程なくしてステージを経験、スポットの光で照らされた瞬間、雅人は何とも言えない感覚を感じた。それまではどちらかというと、根暗な少年のように思われていた雅人が変化した瞬間であった。民謡の楽しさは少しずつ雅人のものになっていったが、民謡で使われている楽器、細棹三味線には何故か興味はなかったという。そんな雅人に転機が訪れたのは、二〇〇一年雅人が通う教室にふらりと現れた。彼がおもむろに叩き鳴らした一の系の音に打ちのめされた時からであった（後の師匠）。津軽三味線という些か大きめの三味線から出てくる音の迫力、その旋律のかっこよさに心を鷲掴みにされ「俺もあんな風に気持ちよくさせてえ」と津軽三味線を手にした。柴田雅人十五の春のことだった。幼い頃より楽器を習う事は少なかった。しかし、多くが親の奨めとか、友達と一緒にやり始めることが多いため、中学生にもなると辞めたいという子供は多い。その多感な時期に雅人は津軽三味線と出会った。この事は彼の楽器への姿勢を決めることに大きく影響していた。自分が見つけ出した事へのめり込んでいったのである。かつての白川軍八郎氏が仁太坊から物凄いスピードで吸収していった様に、雅人も驚く速さで津軽三味線を習得していった。

が、最初の壁は意外に早く訪れた。





二〇〇二年五月、津軽三味線を始めて一年の時、津軽三味線全日本金木大会（青森）に「いける！」と勢い込んで初挑戦するも、中高生の部で年下の女子にさえ早弾きの速度で圧倒され完敗する。地元で天才といわれ、奢る気持ちに負けたのであった。会場で一流になる事を断念、帰路に就くも、元が謙虚でない雅人は、家につくころには翌年のリベンジを硬く心に決めていた。雅人は即座に部活も勉強（！）も辞め、津軽三味線だけの日々をそれから一年過ごすことになる。今までテクニクや知識が、自分の中にどんと入ってきていた楽しさは影を潜め、「これじゃ駄目だ！」という焦りや、苦々しさに悩まされる時間が多くなっていった。ただそんな中、大会に向けてオリジナルの「津軽じょんがら節」の曲弾きを作る事なども覚えていった。二〇〇三年四月、津軽三味線コンクール全国大会（東京）、部門分けのルールが大会毎に違った為、この大会で十七歳の雅人は一般の部で参加。戦う相手は中高生ではなく、昨年の金木大会のA級優勝者や、他の大会の優勝者が参加する中での演奏であった。そしてこの大会こそが、柴田雅人の津軽三味線の輝かしい航跡のスタートとなる。無名だった柴田雅人が優勝を獲得したのである。結果、鼻の高さは天狗をも超え、優勝という結果が生み出すもうひとつの作用。審査員の大御所先生方や観客に認められるという楽しさも知ったのである。まるで禁断の果実を知ってしまったアダムのごとく、以後大会を制覇することに力を注いでいった。二〇〇二年二十八歳まで数々の津軽三味線全国大会に挑戦し、弘前、金木、東京、名古屋、大阪、神戸の大会最高部門で合計十三の優勝を獲得。最高部門の優勝回数で世界一の座を獲得するまでにいったのである。近年津軽三味線日本一と名乗る奏者がたくさんいるが、最高部門であるA級以外での優勝（少年少女の部、団体の部など）をカウントしているからであり、二〇十七年現在、A級十三回優勝獲得は柴田雅人以外達成していない。しかも大会の数は増えて





いるのにである。柴田雅人は何故こんなに全国大会にこだわったのか。先に述べた楽しさがあったからか。否、二〇〇三年の全国大会優勝がきっかけで、雅人はプロの津軽三味線奏者を目指す決意をしたからであった。漠然とはあったが、優勝を重ねることで既に当時有名になっていた吉田兄弟を追い抜く奏者としてデビューできる！と考えていたからに他ならなかった。

プロ奏者として、その後活動を開始。二〇〇八年には、吉田兄弟の弟吉田健一が率いる「疾風」の創世紀メンバー三人の一人として参画。アジア、ヨーロッパ、アメリカでの海外活動もこなし、後年プロ奏者として参加した妹二人とのユニット「柴田三兄弟」での活動も始まり、数多くの経験を積んでいくことになる。二〇一三年からは活動拠点を東京に移し、新プロジェクトの開発やソロ奏者として現在活動を続けている。

柴田雅人は語る。

「今ロまで、例えば師範として教室を開き後進の指導に当たる事より、津軽三味線奏者としてステージに立つ事にずっとこだわってきた。行き着いたひとつの結論として、邦楽、しかも津軽三味線というジャンルだけで世界に出て行く事の難しさ、三味線という楽器の市民権の弱さを理解した反面、サンフランシスコのストリートで演奏をした時、英語もろくに喋れずジェスチャーと単語でなんとか伝えながら三味線を弾いた。沢山の人だかりの中から可愛いプロンドの髪の子が飛び出てきて踊り始めた瞬間、本当に音楽に国境は無いつて実感したし、やはり俺は世界中に三味線の音を届けたい！って気持ちになった。これからも、一音で柴田雅人の音色だと言われる唯一無二の存在、音を目指していく。」

世界中でスシ、サムライ、フジヤマと同じくシャミセンと言わせたい。三味線をギターのように誰でも始められる楽器と感じてほしい。それがもうひとつの野望ですね。」